



第二回 岡田隆介

今回からのエア絵本は、ママ友・パパ友たちが子育ての悩みを話し経験談を語り合うという設定です。エアとはいえ絵本ですから、いちおうは描く努力をしました。SurfacePro とペンとお絵かきソフトのレイヤーを駆使して。

そのとき頭の中で流れていたのは「もしもピアノが弾けたなら」という中年応援ソングです。およそ 20 年前、まだ西田敏行の体重が 80 キロの頃に流行りました。が、結論は「♪もしも自分に絵が描けたなら、無理無理！」。

次にネットでイラストをダウンロードしました。思いのほかお気に入りを探す手間が楽しかったのですが、マガジンに載せるとなると著作権の問題が出てきます。そこで意を決してプロの漫画家をお願いしてみたら、「ええで」と一発回答。編集長！ご恩は一生(さほど残ってないけど)忘れません。

エア絵本 -ビジュアル系子ども・
家族の理解と支援(2)-
p41~

一宮 茂子

先日、友人の彼女と京都から北陸まで 3泊4日の小旅行。彼女はこれまで経験した様々な出来事を何時間も語りました。で

すがその語りは過去に何度も聴いた内容。彼女は何度も語らないと治まらないほど心の痛みを抱えているということを私は知っていたため辛抱強く聴きました。コミュニケーションの基本姿勢は、傾聴・共感・受容であると理解しています。ですが聴く私は相当なエネルギーを要しました。次回は自由で気楽なひとり旅をしたい。

生体肝移植ドナーをめぐる物語(3)
P274~

松岡 園子

10 月末、代表を務めさせていただいている NPO 法人から、障がい者グループホームの建設にかかる国庫補助金の申請を行いました。結果がわかるのは、来年 2019 年の 6 月です。それまでに何ができるかな？ と考えました。

まず、グループホームで働き始めました。現場の実情を知っておきたいと考えたためです。週 1 回の宿直勤務をしながら、現場の動きを学んでいます。

次に、介護職員初任者研修(旧ヘルパー 2 級)に通い始めました。食事・入浴・外出介助のコツを学ぶためです。

また、NPO 法人スタッフの研修を行う準備を始めました。以前、母と 2 人で塾を開いていた時の生徒さん、親御さんが協力して下さっています。

これまでのお仕事も入れると、今、5 つの仕事をしています。どれも好きなお仕事です。スケジュール帳を見て、楽しみで仕方ない予定ばかりだなあと感じます。周りの環境(夫、小学 3 年生、2 年生の息子たち、母の病状)が落ち着いていて協力が得られるから、あちこち動くことができると感謝しています。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども(3)
P259~

杉江 太郎

とある児童相談所で働いています。院生時代にとある先生に勧められて、野本三吉さんの本を購入しており、当時は読む機会がなかったのですが、この前それを目にしたので改めて読んでみました。

野本三吉さんとは、かつて児童相談所の福祉司をしており、最終的には沖縄大

学の学長をされていた加藤彰彦さんのペンネームです。

古い本でしたが、そこには野本さんの実践が、実在する子どもたちを通して描かれていました。今では、個人情報という名の元に、その手の出版をすることには大きなハードルがあると思われます。しかし野本さんはそのハードルを超えて、当時の子どもの対する熱意をそのままに、それを「物語」として残されていました。

今、児童相談所が関わった子どもの経過が世間に残るのは、「虐待死亡事例の検証報告書」という形が中心です。当然、再発を防ぐために、振り返り、より良い援助が出来るように改善はしていかなければいけません。

一方で亡くならなかった子どもたちの「物語」が残ることはあるのでしょうか。「事実」と「物語」は違います。報告書では事実を扱います。一方で物語には、報告書では表現されない、信念や泥臭さも含まれます。これは個人的な体験によるものであり、報告書からは排除されてしまうのではないのでしょうか。



しかし、野本さんの文章にはそれがありました。偉大なる先輩の存在を知らずにこの仕事をしてきたことを恥じると共に、このように実践されていた方がいることを知り、この対人援助学マガジンで書き続けることの意味を考えました。少しでも「物語」を残せるように努力いたします。

また、その本にはその本の書評が挟まれていたのですが、このマガジンの執筆者である川崎二三彦先生や、この本を勧めて下さった先生の文章が残されていました。その出会いにも物語を感じました。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-(4)
P253~

迫 共

怒涛のように忙しい9月・10月・11月だった。保育実習Ⅰの施設実習訪問、ゼミ発表、大阪と東京を行き交いながら非常勤と取材、研究会発表、学園祭(2年生と3年生の発表)、面接入試の試験官、紀要論文を2本書き、某原稿を書き、もちろん通常の授業もあるので常に休まらない。ある意味ランナーズハイで走り続けられるが、そろそろ一息つきたいと思ったところが師走。また学会発表や入試と色々あるが、ギアを落とそうと自分に言い聞かせています。ほどほどにがんばらないとケガをするので。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ(4) P250~

朴 希沙(Kisa Paku)

この夏、姉家族とともにフィンランドに滞在した際、思いかけず一人旅をする機会に恵まれた。恥ずかしながら、はじめての経験であった。ビザの関係でシェンゲン協定の外に出る必要があった私は、アイルランドへの一人旅を決めた。



アイルランドの首都ダブリンには、ヨーロッパの様々な国から一人旅をしている若者たちが集まってきていた。夜には、希望した人は皆でダブリンのpubを巡る。初めての経験に最初のうちこそ緊張したもの、すぐに馴れ、むしろその楽しさに開眼してしまった。全く自由に行動できる。しかも、一人だからこそ様々な人と交流(しようとさえすれば)できる機会に恵まれる。安く泊まったドミトリ式のホステルでは、友人も一人できた。pub巡りをしながらドイツやネーデルランド、イギリスから来た人たちと話をした。その中でも、ネーデルランドからやってきた高校生の男の子との話が私には印象深かった。結婚の話にな

った時、彼は「ネーデルランドには、結婚をしていない、自分に誇りを持った中年の女性がたくさんいるよ」と教えてくれた。結婚をしていない、自分に誇りを持ったたくさんの中年女性！私は思わず「それは素敵だなあ」と驚いてしまった。日本では、まだまだ多くの女性が”婚活”に焦り、結婚をしていない女性はどこか問題があると見られがちだ。結婚をしていないことそれ自体をネタにされたり、からかわれたりもする。しかしそれは、当然のことではないのだ。日本に住んでいたら当たり前を感じることも、別の国ではそうではないかもしれない。今回ひと夏フィンランドに滞在し、驚いた点の一つは日本とフィンランドの女性の社会的地位の違いだった。男性の女性に対する接し方の違い、と言い換えてもいいかもしれない。娘を持つ姉は、日本で女の子を育てることに時々不安を感じるという。私はこれまであまりその気持ちが分からなかったのだが、今回の滞りでその言葉の意味が少し理解できるようになった気がする。女の子も安心して育てられるような、女性の地位がもっとも認められるような場所を広げる必要を改めて感じた滞りであった。

マイクロアグレッションと私たち(5) P246~

浅田 英輔

高齢者に関する仕事をしていて感じるのは、研修会が非常に多い！県がやるもの、市町村がやるもの、専門職団体がやるもの、民間企業、NPO、住民組織などなど、田舎のはずの青森県でさえも毎週何かしらやっている。やはりニーズは多いだろうし、学ぶ人も多いのだろう。いいものもあるし、そうでないものもある。そこでも強調されるのは「連携」だ。連携は必要だと思うし、結局は顔を合わせないとなかなかいい連携にはならない。絶対必要だと思うのだが、こうまでも連携連携言われると、知識もちゃんと身につけなきゃな！と思うのは天の邪鬼だからか。

臨床のきれはし(3) P125~

三浦 恵子

今回は介護について書かせていただい

た。思えば家族介護従事者としての生活も約20年となった。現在は単身赴任中であるため、普段は手作りのおかずをフリージングして冷凍便で送り、定期的に介護帰省を続けている。

介護帰省の際に利用する新幹線はいつも同じ便だが、週末ゆえ指定席車両はいつも満席で、デッキにも人が溢れている。

ある日、走行中の新幹線が突然停車した。緊急停止ボタンが押された旨のアナウンスが入り、乗務員の方があわただしく移動するなか、車内に緊張が走ったのがわかった。

しばらくして次のアナウンスが入った。「急病のお客様がいらっしゃいます。医師や看護師の方がいらっしゃれば乗務員にお申し出ください」

この時感じた「ざらっとした」感じを私はいまだに拭えないでいる。緊張に包まれていた車内の空気が明らかに緩んだように感じられたのだ。

他の乗客の方々は乗客はスマホをさわったり、あるいは飲食に戻りながら、運転再開を待っている。

声高ではないが、列車の遅延に対する不満を述べ合う方もおられたように思う。6月に「のぞみ」車内で発生した殺傷事件が大きく報道されて間がない頃でもあり、「また事件では」と身構えてしまう心情は無理もないと思う。しかし「車内で急病人が発生している」ことも一大事ではないのか。自分に危害が及ぶかもしれない「事件」ではないというだけの理由で、この事態をいとも簡単に自分から切り離し日常に戻ってしまえることが不思議だった。

もちろん資格や心得がない者がやみくもに動くことは円滑な救護の妨げになる。ただ、旅程中に突然病いに襲われた方の苦しみに思いを馳せるようなそんな雰囲気薄いことが、今の日本社会の一面を示しているようで残念に感じた。

現代社会を『関係性』という観点から考える(6)

P233~

寺田 弘志

ここ1カ月、印象に残った人・本・言葉・出来事。

10/24

茨木市在住のマジックアーティスト・SEIYA Aさんのお話を聞く。「マジックで大事なものは、タネではない。タネ以外が9割を占める。舞台上に登場したときの第一印象、雰囲気。キャラ。自信に満ちた笑顔。意識をずらす。フォーカスを定める。ミスディレクション。暗示。おまじないをかける。不思議を残す。そういう要素が大事。マジックはいちばん起きているのはどこかどこか？・・・人の脳の中」

実際にマジックを見せてもらったが、間近なのにまったく見破れない。教えてもらったマジックを家族に披露すると、けっこう受けた。次のマジックショーを予約。

SEIYAさん推薦の「キャラがすべて」を読む。キャラ戦略はわかったが、どうしたら自分のキャラが出せるんやろ？

11/3

ユーモア造形作家の江口旦さんのお話を聞く。友達に恵まれた方だ。糖尿病で足を切断しておられるのに、おもしろい人形作品で人を笑わせる。「わらって前へ」という著書を読む。わらえて、元氣と勇氣をもらった。

11/14

「虫歯から始まる全身の病氣」を読む。一度虫歯になると、虫歯菌を除去することはできないと知る。衝撃を受けるも、今までにない虫歯菌対策を思いつき、具体策を練る。著者がまとめて引用したショーペンハウアーの言葉。「真実というものは三つの段階を通る。最初は馬鹿にされる。次に猛反対に遭う。そして最後に自明の理として受け入れられる」

11/21

脳科学者・黒川伊保子さんの著書を2冊読む。ほんまかいなと思いつつも、女心を少し理解できたかもしれない。「(プロは)見ただけで信頼に足る立ち居振る舞いを身につけてこそその「一流」なのである」なるほど。

11/23

「催眠学研究」が届いていたので目を通す。福来友吉の業績を改めて知る。福来は、トリックにひっかかり、透視と念写の実験に没頭したために東大を追われた。優秀な催眠学の研究者を失ったこと、催眠学研究が滞ったことは、日本にとって大きな痛手だ。

11/24

日本伝統鍼灸学会の市民公開講座に行く。日本の鍼灸のルーツが茨木市だったことに驚く。戦国時代、茨木市にいた茨木元行(げんぎょう)が口伝の鍼術をまとめた「針聞書」を編纂。「針聞書」には63種のハラノムシが記されており、昔の日本人の疾病観がよくわかる。

同講座で、武術研究家・甲野善紀さんのお話を聞く。「相手の太刀をかわずには、太刀を受けようとする自分と、太刀から逃げる自分の二人がいる。初めから逃げていたら、相手の太刀が追ってくる。ぎりぎりまで受けると見せて、最後の間一髪をかわず」

この話を聞いたとき、古武術、剣道、柔道、ラグビーなどの球技、マジック、催眠、キャラ、プロ・・・これらに共通して必要なことが見えた。相手の意識を、自分(または自分以外の何か)に引きつけること！

[接骨院に心理学を入れてみた\(6\)](#)

P229～

飯田奈美子

秋から、授業を担当させていただくことになりました。隔週ですが、5,6限の授業があり、授業終了が遅く、その日は保育園にお迎えに行くことができません。春から準備を始め、知り合いのファミリーサポートさんにお迎えをしてもらう段取りをつけていたのですが、始まる前に急きょキャンセルになってしまいました。あわてて祖父母(遠方に在住)と夫(日本的長時間勤務の中間管理職サラリーマン)に協力を仰ぎなんとか半分を終えることができました。幸い、近所に民間の夜間保育(一時預かり)が見つかり、次回はそれにチャレンジしてみる予定です。いろいろありますが、あせらず自分のペースで進んでいきたいと思います。

[対人援助通訳の実践から\(6\)](#)

P***～

山口洋典

10月下旬、人生初の骨折、そして入院・手術を経験しました。9月初旬に西日本に猛威をふるった台風21号による倒木被害に対し、京都・東山界隈の山中での片付けボランティア中に不注意で転倒し、

仮置き中の巨木により左足首が圧迫されてしまったことによるものです。



多くの方々のやさしさをあたたかく頂戴しつつ、ちょっとしたことでの不便に不自由さを痛感する場面に多々直面しています。その一方で、車椅子、両方の松葉杖、そして片方の松葉杖と特殊装具という具合に見た目が変わる中、私に寄せられる眼差しから、健常や普通や一般といった言葉で人を一括りにすることによって意図せずに埋め込まれてしまいかねない誤解や偏見など、援助・非援助の力学にも思索を巡らせています。

(写真、道行く人から何度も目で追われるスライド型PTB 免荷装具)

[PBLの風と土\(7\)](#)

P223～

関谷 啓子

大文字の山を見上げる高台にバプテスト病院はある。毎週木曜の午後、五階にあるホスピス病棟のボランティアに通っている。沢山の人の旅立ちに立ち会って5年が過ぎた。エレベーターを降りて最初に目に飛び込んでくるのは周りを取り囲む山々の緑と青空だけだ。今の季節、大文字を囲む山がそれぞれに紅葉し、陽の光に輝くのは息をのむほどに美しい。

この夏に短歌教室で一緒だった友人が入院してきた。「今年の大文字は一緒に見ようね」と約束した。「私はこのベッドから動けなくなったけれど周りの世界は普通に動いていることがありがたく嬉しい」と話してくれた。癌と知った時の苦悩や苛立ち、を語ってくれた。残された時間が少なくなるにつれて研ぎ澄まされていく感受性を語ってくれた。最後の時間を密度濃く生きる姿を見せてくれた彼女は、大文字の四日後に逝ってしまった。死に正面から向き合い、静かに受容した人間が、日を追うごとに昇華していく姿を見せてもらった。見

事な幕引きであったと思う。

彼女の最後の日々に寄り添って過ごした・・・と思っていたが、寄り添われ助けてもらったのは私だったと今、気がつく。岡野いく子さん 傍に居させてくれてありがとうございました。

私の出会った人々(8) P214～

黒田 長宏

郷土力士の稀勢の里も再び苦しいところだ。なぜに試練を与えられたのか。地元も劇的で、現市長が在職中に亡くなってしまい、その葬儀の日に選挙で戦った前市長が亡くなるという怖いようなタイミング。そして新たに立候補した二名が、どちらも学校は違うが、一人は同学年で、一人は一つ下という、まさに同世代が立候補。私もそれにはなんだか気にも掛ける面もあるが、そもそも今回の本文の内容は私も変化を見せたいという内容になっているが、それも不思議なタイミングかも知れない。しかも、その二人は、親と祖父が合併前の町長選を争った仲であり、二人は、小学校から大学まで同じと言う。高校は実は私も受かっていたのだが、県立の高校も受かったのでその私立高校には行かなかったけれど、県立に落ちていたら、その二人は高校時代に見かけたり、片方は同クラスになっていたかも知れないくらいである。しかも、その片方の親父さんと奥さんは、某営業マン時代に、取引をしようとして何度か通って顔見知りになっていたのだった。しかし、営業マン時代と言うならば、大女優と言っても良いだろう、永作博美さんのお父さんのところまで私は営業をしたことがある。どちらも受注には至らなかった。

ああ結婚(8) P220～

鷓野祐介

「私は不思議でたまらない。アサギマダラという蝶はどうして2000キロも飛べるのか。どうしてフジバカマに吸い寄せられるのか。いつか『ダーウィンが来た！』で取り上げてもらえないでしょうか。

うたとかたりの対人援助学(9) P216～

臼井 正樹

神奈川県立保健福祉大学という公立の小さな大学で、2006年から教員として学生を指導してきた生活にも、あと4カ月余りで一区切りを迎える。そうした中で、これまで考えてきたことを、まとまりのものとして残しておきたいと考えようになったのは、多分に年のせいであるように思われる。前回もここで紹介した『対人援助と親密圏』というタイトルのまとまった文章は、単著としてまとめることが難しくなってきた。しかし、「介護福祉に関するプラスの価値をどのように言葉にするか」ということに関しては、大学教員という立場を離れたとしても、残っている時間の中で最善を尽くしておきたいと考えている。

介護福祉を巡る断章 P189～

山下桂永子

旅行は好きなのですが、写真は苦手です。嫌いではないのですが、苦手です。うまくできないからだと思います。綺麗に撮ることはもちろん出来かねるし、撮っても自分の嫌いなどところばかり気になるし、生理整頓が苦手だから、アルバムにまとめることもできないし、目に触れなくなったり意識しなくなると撮ったことを忘れるので、後で見返すこともほとんどしません。綺麗な写真を壁に貼ってもいつの間にか壁の風景と化し、ほこりを被らせるだけで味わえません。それでも時代の波ののっかってインスタグラムのアプリを3カ月ほど前にダウンロードはしてみたのですが、最初に3枚ほど更新してそれきりになっています。ハッシュタグの意味、わかってません。



そんな私ですから、町家合宿の記録とし

ていつも写真を撮ろう撮ろうと思っても、いつの間にか撮ろうとしていたことすら忘れます。特にこの2年ほどは、対人援助マガジンの原稿を書くたびに「ああ～なんであの写真撮ってなかったんだ～」と写真に関して後悔ばかりしています。

というわけで今回は写真について書いてみました。読んでいただければ幸いです。

町家合宿 in 京都(9) P196～

尾上明代

今回は、飛び入りテーマとして、9月に起きた北海道の地震後の支援について報告させていただきました。地震一週間後の札幌とドラマセッションとを絡み合わせながらの記述です。

年に何回かずつ札幌を訪れています。セッションをするのはとても楽しいですが、それ以外の楽しみがあります。スープカレーです！もちろん、今や札幌でなくてもスープカレーは全国で食べられると思いますが、現地にしかないお店の一つが、奥芝商店が提供する「おくしばーちゃん」で、「おばあちゃん・おばちゃんたちが生き生きと働くお店」です。好きな天ぷらを選んでスープカレーに入れてもらうスタイルで、牛肉の天ぷらとカチョカパロチーズの天ぷらが本当に美味！奥芝の何よりの特徴は濃厚エビスープのベースがおいしいことですが、それとこの天ぷらの組み合わせは最高です。このようなインセンティブをもって訪れることは、生身の人間として当然必要！

ドラマによる地震後の支援 P82～

小池英梨子

NPO法人の中で、人もねこも一緒に支援プロジェクトとして活動したり、猫専門のお手伝い屋さんとして仕事をしたりしていると「猫が好きなんですね」と言われる。かなりの確率で。でも、心の病気を持つ女性を対象にしたNPO法人で働いている時に「精神障害を持っている人が好きなんですね」と言われたことはないし、子どもの一時保護シェルターで働いていた時に「子どもがすきなんですね」と言われたことはな

い。幼稚園の先生は「子どもが好きなんですわね」と言われそうだなあ。老人ホームで働いている人は「お年寄りが好きなんですわね」と言われるのだろうか。違いはなんなんだろうか。不思議だ。

そうだ、猫に聞いてみよう(12)

P200~

松村奈奈子

今年の夏休みの北海道トマム旅行のお話。

9月4日に台風21号と関空連絡橋に船が衝突して関空閉鎖9月6日に北海道胆振東部地震で新千歳空港閉鎖

9月7日の関空発新千歳行きの航空券を握りしめ、オロオロ、オロオロ。ホテルに電話すると「自家発電、食料の備蓄もあるので大丈夫」「ぜひ、来てほしい！」と熱いラブコール。

結局、7日は観光客が大量にキャンセルし、午後再開した大阪空港発新千歳空港行きの飛行機に乗れちゃいました。大混乱の空港に迎えに来たホテルの超大型バスは、国内外の旅行者がみんなキャンセルで乗客は我々夫婦2人きりでした。道中、運転手さんとは自然と地震の話に。そして、数日間の滞在中、ホテルはずっとガラガラ。手の空いた従業員はみんな優しいし、シェフも暇なので、スタッフ曰く「これまでに見たことが無い」ほど手の込んだ料理が毎日提供されました。至れり尽くせりで、ちょっと申し訳ない気持ち。



そしてトマム名物「雲海テラス」。朝4時に起きても行列ができ、乗るのに通常は1時間待ちという雲海テラス行きのゴンドラも、もちろんガラガラでした。雲海テラスも人は少なく、ゆったりコーヒーを飲んだりして。雲海を独占し満足気分の私達とは対照的に、カフェから見つめる手持無沙汰な大勢のスタッフの何とも言えない表情が印象的でした。

インバウンドや国際的イベントで盛り上がる日本。しかし、台風と地震の国の、観光への依存が抱える問題を実感した旅でした。

精神科医の思うこと(11)

P168~

奥野景子

専門学校に入学して約7カ月が経ち、失業保険も切れた。と言うことで、理学療法士として訪問リハビリのアルバイトを始めました！！でも、本業学生は崩したくないから、とりあえず週2回、3時間から。ハード面でのシステムは変わっても、現場で行なうことは大きく変わらないかな～と思っています。そして、半年以上現場から離れたところからの復帰は、不安よりもわくわくの方が大きかったりもしています。大変なこともあるかと思いますが、今までのように楽しみ、面白がりながら、それなりに悩み、苦しみ、もろもろ考えながらやっていたらな～と思います。

私は、終わりが見えると手を抜いてしまうタイプです。ただ、手を抜きつつも終わりが来ていないことは自覚している方だと思います。これからも、ぼちぼち、思い出したように、でも着実に、やっていたければなあ～と思います。

おくのほそみち(11)

P173~

柳 たかを

先日、連れ合いが自宅集合住宅一階にある機械式駐車場に車をバックで入庫しようとした時、車体の左側を鉄柱でこすってしまった。

車体の助手席ドアの真ん中から下部のステップ部分にかけて前後の長さ約15~20cm、上下幅4cm、最深部5~7mmの傷が2つ、同じ長さの引っかき傷2つ。

本人曰く「運転に慣れて、多分大丈夫とやや横着な後方確認のままバックし続けてしまった」

車体は凹んだが、こすった駐車場の支柱には車の塗料がついてはいるが、鉄製の支柱そのものはビクともしてないので、とりあえず軽微な自損事故ですんでよかったとホッとした。

車に乗っていれば、注意しているつもり

でもヒヤリとした経験をするものだ。大きな事故にならなくて幸いだったと思う。

さて、我が家のマイカーは中古車で、すでに細かい引っかき傷はある、その都度車体と同色のカラーペンで目立たない補修はしてきたが、今回の傷は板金塗装が必要な大きな凹み傷だ。

一応、加入している保険を使い修復に出すことも考えた。しかしである、私はただ今趣味でDIYで小屋を作るべく、土を掘り起こし、砂利を敷き詰め、コンクリートを打ったりしている。費用は材料費のみ、勤め人ではないので豊富な時間が武器である。

「経験はないが、これくらいの板金塗装ならDIYでなんとかできるのでは？」というわけで、ただ今DIYでマイカーの板金塗装に挑戦中！

自分でやるDIY作業は、途中の工程をいかに楽しめるかが主、結果は従。

板金といえども目の前の作業に集中し丁寧にやると気づきや学びがあり飽きない。ゴールを設定して取り組む仕事は、わが本業であるマンガ制作とも通じるものがあるように思い一人で納得している。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ

P181~

齋藤 清二

京都は紅葉真っ盛りです。第一回公認心理師試験の発表を数日後に控えた今日この頃ですが、みなさまお元気でしょうか。このたび、対人援助学会の理事の末席に加えさせていただきました。毎週の授業の準備に追われています。現場からは以上です。

「あ！萌え」の構造 番外編5

P161~

小林茂

思うところが募り、前職を辞めてから気を張っていたのが緩んだためか、いろいろな体調不調が現れるようになった。手当てをはじめて良くなってきたこともあったが、どうも気力のスイッチが入らなくなった。試験など直前に近づけばその気になれるかもしれないと思いながら、ものの見事に入らない。何たることか、と思う。毎日、忙しすぎるのが問題かとも思うが、どうも以前

の感じとは違う。

ある時、人から男性の更年期ではないかと言われた。そういうものがあるとは知っていたが、自分とは関係ない話と思いついていただけに、調べてみると当てはまる要素がいくつもある…。いや、病気とは言わないが、加齢による内分泌系からくる変化というものは意識とは異なり、抗いようもなくやってくるものだと感じた。さて、自己診断ではなく、一度、きちんと血液検査をして自己研究を深めてみようと思うこの頃です。

<温泉紹介>

☆平泉ホテル武蔵坊

場所: 〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字大沢15

TEL:0191-46-2241

平泉温泉 平泉ホテル武蔵坊は奥州藤原氏ゆかりの地、平泉の中心に位置し、中尊寺・毛越寺の観光に最適。私もホテルを起点に歩いてみて回りました。徒歩による観光に立地が特に良い。温泉は、源泉かけ流しではないが、やわらかく体が休まる質感です。

泉質: ナトリウム塩化物泉(低張性弱アルカリ性高温泉 pH7.9、自家源泉) 内湯1か所のみ。

営業時間、料金など: 年中無休。10:00～15:00、15:30～20:30 大人 620円

対人支援 点描(16)

P156～

川本静香

私事ですが、今年は本厄でして、何が起きるんだろうか・・・とビクビク過ごしてきました。そうしたら、8月に料理中に親指をバツサリ切るといふ厄が訪れました。前回はその治療と、痛みから、お休みをさせていただいたのですが、第35号から復帰をさせていただきたいと思います。抜糸からすでに3ヶ月経っているのですが、寒くなると地味に痛いんですね。。残り少し、厄に気をつけて日々真面目に過ごしていきたいと思います。

学校における自殺予防(4)

P239～

中島弘美

引き続き、教育研究委員を担当させていただくことになりました。よろしく申し上げます。今回は、研究会についてです。

これまで、キャンパスプラザ京都を会場に23回、学会準備活動から数えると通算47回の研究会が開催されました。(新しいホームページに過去の研究会記録が掲載される予定です)

研究会は、事前申し込みなしの直接参加で、費用は無料です。そしてゲストスピーカーの方は、謝礼および交通費もなしでお引き受けいただいています。

スピーカーの方々のご理解なしに研究会を開催することはできません。貴重なお話を本当にありがとうございます。

今後は、多くの方に参加していただけるように日程などを工夫し、広い視野から対人援助の学びを深め、参加者同士の交流もできれば嬉しいです。もしも、ゲストスピーカー依頼のお声掛けをしたときには、ぜひお力添えをお願いいたします。

カウンセリングのお作法(17)

P34～

藤信子



秋学期から茨木キャンパスに本格的に通勤し始めた。電車通勤など、何十年もしたことがないので、乗り換えなどいくつか試してやっと慣れてきた。JR 京都線は京都から茨木までの間に、桂川、島本、総持寺の駅ができて(多分この頃)、新しくできた(と思われる)建物を見るのも面白いが、長岡京から高槻の間は、まだ畑があったり山も近いので、花や木を見て季節の移り変わりを感じたり、時刻による空気の色の違いも面白い。この秋は、週末に研修等の仕事が多く入っていて、新幹線や飛行機であちこちに行く必要があり、移動には少しうんざりしている気持ちもある

けれど、京都—茨木間は30分弱なので、ぼんやり景色を眺めている。もともと電車とかでは本を読むことが多いけれど、ここはしばらくぼんやりすることを楽しんでいる。

今号はあちこちに出かけたツケがきて、疲れが溜まって、原稿が書けなかった。34号まで、欠かさず執筆していたのは、半ば私の強迫のせいもあると思っていた。途切れず書かないと、書くリズムを維持できないような気がしていた。でも、今回休むことになって、また次の原稿のことを考えてみようと思う気持ちになった。多分2月は、またテーマを考えて書こうと思う(はずです)。

千葉晃央

編集を担当している雑誌で「里親制度」を特集しました。里親をしている方の思い(対人援助学マガジン執筆者 坂口伊都先生)、里親と行政と医療をつないだ新しい取り組みをしてくださっている方(対人援助学マガジン執筆者 荒木晃子先生)のお話、イギリスでの里親制度について、中国での里親制度について、日本の里親制度についてご協力をいただき、発刊することができました。(執筆してくださった皆様、本当にありがとうございました!)

里親サポートセンターの方々にもインタビューもさせていただきました。現場に足を運び、スタッフの方に出会い、その思いを伺いました。さまざまな状況がある中で、それでも向き合う福祉課題がある。だから、前に踏み出す。その姿勢に脱帽です。是非多くの方の目に触れてほしいです。興味がある方、千葉(chibachi@f2.dion.ne.jp)までご連絡ください。

知的障害者の労働現場

P17～

中村正

立命館大学に専任教員として勤務したのが1989年4月。立命館大学に学生として入学したのは1977年4月。定年まで勤務して33年間、さらに再任用を想定すると38年間になる。18歳の時の入学から数えると52年間にもなる。なんと長いこと。大学にしかいたことがないのだから井の中の蛙だろう。とはいえ人生は80歳、90

歳時代になっている。私の母も 85 歳。元気が先は心配である。メント・モリはラテン語で「死ぬことを忘れるな」という意味。「死を記憶せよ」、「死を想え」とも言われる。樹木希林さんは 75 歳だったがメント・モリの言葉がぴったりの人だった。彼女の生き方には励まされる。大学院で取り組む東日本家族応援プロジェクトで青森県の下北半島に毎年でかけている。



恐山が好きでなるべくいくようにしている。ここはパワースポット。出身の伊勢志摩にもパワースポットがたくさんある。パワースポットにはメント・モリという言葉がよく似合うようだ。不思議なものだ。メント・モリは生きるための呪文のようでもある。ネットで調べると「明日は死ぬかもしれないので生きて今を楽しんでおけ」という意味でもあったようだ。光と影、陰と陽、昼と夜のなかで私が好きなのはその「あいだ」。たそがれ時、影をみつめてみえてくるもの、汽水領域、グラデーション、そんな言葉で考えるといろいろ面白い。一義的には決められない、そんな事態が好きなので知的な関心にもそれが反映される。ひとつの分野では満足できないようだ。こんど研究仲間と『治療的司法の実践』という本をだした。第一法規からの出版である。法と心理、福祉と法律、弁護士との協働等の「あいだ」にいろいろ架橋した。ご笑覧いただければと思う。

臨床社会学の方法(23)

P21~

袴田 洋子

今回から、若年性認知症をテーマにしてみました(念のため申し上げますが、連載の内容は、フィクションです)。これから、地域の人たちと、若年性認知症の当事者の会を立ち上げる予定です。練馬区の「マリネの会」や、三芳町の「けやきの家」などに見学に行っています。マイノリティの人の支援、になるので、事業として成り立たせるのは、無理かもしれませ

ん。なので、ボランティアになりますでしょうか。まずは、始めてみて。来月は、町田市の「本人会議」を見学に行く予定です。

追記:前回の「盲腸騒動」ですが、退院後、一度、フォローのための外来診察に行き、オペで切り取った盲腸の病理検査の結果、分類的には最重度の「壊疽性虫垂炎」となりました。みぞおちの痛みがあったら、盲腸疑い、ということで、救急車で搬送されることをお勧めいたします。

援助職のリカバリー(28)

P114~

団遊

「人を育てる会社の社長が今考えていること」として今号から新たに連載を始めることにしました。

振り返ると、私自身が昔から会社を「人が育つための装置」だと考えていたわけではありません。一時は上場を目指して経営のかじ取りをしていたときもありました。

大きな転機は、倒産しかけたことでした。いえ、倒産したといっても過言ではありませんでした。役員に報酬が払えなくなり、社内は愚痴だらけ。法人通帳の残高は 6 万円。もちろんぼくは、長く報酬を取っていませんでした。請負業務が中心の会社でお金が回らないということは、少々乱暴な言い方になりますが、社会に必要なということです。設立から 4 年ほど経過した頃でしたが、一体何をしてきたのか?と泣きたくなりました。

どうせ倒産するならば、最後やりたいことをやろうと思い、仕事より社員が育つことを重視する経営を始めました。仕事に人を充てるのではなく、人に仕事を充てるのです。まず手を付けたのは、誰もしたくないであろう仕事を断ることでした。

あれから 10 年以上が経過しました。自己破産して一人で背負いこむ予定だった借金は綺麗になくなり、毎年黒字経営が続いています。その経緯があるからこそ、「本気の人育ては経営戦略に通じる」と確信しています。

人を育てる会社の社長が、今考えていること

P31~

大石仁美

先日、とある公園で、駐輪場はどこかなくとキョロキョロしていたら、いきなり「どかんかい!! ベル鳴らしてるのが聞こえんのかい!!」と怒鳴られて、びっくりした。振り返ると 60 代半ばだろうと思われるおじさんが、自転車にのったまま仁王のような形相で立っていた。どうやらおじさんの進行方向に私が立ちはだかつて邪魔していたらしい。けど、ここは公園。私が立っている後ろも、通れるスペースは空いているし、もちろん前は広々スペース。ん?なんで?突然不意を突かれて、罵声の意味がわからず、キョトンとしていたら、「おまえは耳が聞こえんのか! あほか! どうしようもない人間やな」と、さらに捨てぜりふを残して去って行った。どうしても通りたければ、「ちよっとごめん! そこ通してほしいんやけど」と普通に話せないのだろうか。「すみません」と言ったものの、あとからじわっと腹が立ってきて、「どうしようもないのはおまえやろ、アホ!」と心の中で叫んでみたが、すぐにグーツと押さえて、こんなことで一日不愉快な気持ちで過ごすのはもったいない。無視、無視。なかつたことにしようとして自分に言い聞かせた。それにしてもいい年をして、ああいう態度でしか人と接することが出来ない人っているんやなあ。いままでどんな人生生きてきたんやろう。たぶん、家族からも疎まれていて、孤独でいじけた初老の居場所のないおっさんの、今までとこれからの姿を想像してみたら、ほんまに可哀そうだった。そしたら怒りも自然に消えていた。

病児保育奮闘記(20)

P153~

村本邦子

3 年前の福島でのプロジェクトをまとめながら、8 年目の福島でプロジェクト実施中。福島をめぐる状況はますます複雑に、良くない方向に向かっているなど思う。民間と行政の関連ミュージアムを比べながら、たくさんのことを思う。そんななかで良心的な活動や研究を続ける人々には頭が下がるし、何とか希望をつなぎたいと思う。私も細々でもできることをやらなければ

ば！ 思いは大きく、しかし、最近ちょっと体がついていなくて、体調を崩している。日々楽しく充実しすぎて、今年は調子に乗りすぎたかと反省。来年は、自分の年齢を考慮に入れ、地道に頑張らねば。

**周辺からの記憶 —東日本大震災
家族応援プロジェクト(21)
P141~**

國友万裕

11月の初旬、文字通り、「男は痛い！」という経験をしました。土曜日の夜からお腹が痛くて、日曜日の夕方休日診療所でお腹のレントゲンを撮ってもらったところ、大便とガスがたくさん溜まっていて、これがすっきり出れば治るだろうという診断でした。ここのところ、ダイエットで食べるものを減らしていたせいもあって便秘気味でした。汚い話なのですが、便秘になると最初の便が固くなって、肛門を塞ぐ蓋になってしまい、これが外れない限りは後に詰まった便が出ないのです。で、ここで浣腸をいただき、家のトイレで一生懸命力みました。するといつてもたつてもいられないくらいの激痛が走りました。

あまりにも痛いので救急車を呼び、病院へ。診断結果はヘルニアでした。カんだことが原因で脱腸してしまったのです。鼠径ヘルニアというやつです。幸い、ベテランの男の先生が押し込んでくれたので、どうにか元に戻りましたが、その日は入院することになりました。痛みが治るまでは、あられもない姿で、「痛い！痛い！」と身をよじっていたので、知っている人から見られたらお恥ずかしい姿でしたね。しかも、鼠径ヘルニアだから、睾丸の部分を先生や看護師さんに見られる(笑)。でも、あの時は痛すぎて、恥ずかしいなんて言っていられませんでした。

この後、便秘には気をつけようと早速、家のトイレをウォシュレットにしました。ウォシュレットは肛門をマッサージしてくれるため、便が出やすいという話を聞いたからです。このところ、友人から中古の電子レンジをもらい、テレビは観ないので放して、NHKの受信料も解約です。その代わりに、大きな液晶画面を買って、これでDVDを見る生活。友人が中古のブルーレイプレ

イヤーをくれたので、これからはブルーレイも観ることができます。そんなふうで、要らないものは捨てる、必要なものは買う、もしくは貰うという、断捨離と再利用のサイクルができあがってきました。

思えば、もうすぐ55だから、できる限り省エネ生活にしないとエネルギーが持たないです。老後のための蓄えもある程度は必要。今回、突然一泊入院でお金がかかったのですが、入院保険に入っていたので、それで賄うことができました。転ばぬ先の杖も大事。齢とともに、堅実な生活になってきたなあと思ながら思います。これから僕の人生は燦し銀の時代となりそうですね。

**男は痛い！(29)
P108~**

北村真也

認定フリースクール 学びの森 代表
<http://manabinomori.co.jp>



2000年より、京都府亀岡市で学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験のある若者たちが学ぶ「ユーススクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の5つのスクールを展開中。亀岡市教育委員。

**不登校経験を持つ若者たちのもう
一つのキャリアパス(4)
P59~**

古川秀明

認知症の予防はとても大切です。こんなふうにいる私もそういう年齢になります。そこで自分の認知症予防も兼ねた回想法ライブをやっています。懐かしい歌を聴き

ながら思い出を語る。ただそれだけで効果があるようです。皆様も一度体験しにきませんか？

**シンガーソングライター
講演会&ライブな日々
P130~**

西川友理

京都西山短期大学で、保育士養成をしています。

「どうしよう」と困った時に、状況をよく見たままであえてポイっとほったらかす事、誰かや何かに振り回されている時に「あー、なんか、ふりまわされとるわあ」と思いつつ振り回されてみる事、疲れたり弱っていたりする時の方が周りの状況がよく見えて、相手に伝わりやすい姿勢とリズムで話せるようになる事、こういったことで不思議にうまくいく支援があるなあと思うアラフォーです。気力と体力で何とかできなくなってきたらなってきたで、それ相応の新しいスキルが自然と目の前に現れるのが不思議です…なんて言ったら、各方面の諸先輩方から「何を言うてる、まだまだ若いかな！」と叱責されそうですが(笑)その先輩方は当然ながらさらに高度なスキルを駆使して、素敵な支援をされています。年取るっていいなあ、すごいなあ。日々、勉強させていただいています。

**福祉系対人援助職養成の現場から
P70~**

坂口伊都

最近、よく考えさせられるのが、頭でわかっているけど体現することは難しいということです。そこが人間の不便な部分なのかも知れません。そして、体現できないことに気がつくまでも時間がかかるようです。体現できない憶測に自分でも意識していない価値観や呪縛があります。私が何を許せないのか。自分の行動で譲れない事はいいのかなと思うのですが、許せないものは、子どもの頃から植えつけられた〇〇でなければならぬという感覚に左右されているのだと思います。それは、子どもの生き方を容認できるかできないかに繋がっています。

いろいろな親御さんに出会いますが、これだけのことが言えるのに子どもに対す

る行動は何故こうなるのだろうかと感じることがあります。「わかっちゃいるけど、やめられない」と言ったのは、植木等さんのスーダラ節だったような。そんな単純なものではないのですよね、きっと。その辺りも感じながら生きてみようと思っている今日この頃です。

養育里親～もうひとつの家族～(23) P136～

河岸由里子(臨床心理士)

【胆振東部地震から】私の住んでいる千歳は、石狩管内ではあるが南端に位置し、すぐ胆振管内になる。厚真、むかわ、穂別、安平などはお隣さんのようなもの。地震の震度も6弱で、かなり大きな揺れであった。あんな大きな揺れでは逃げることもできない。布団の上で、ただ揺れが治まるのを待つだけだった。治まったところで被害の確認をと電気をつけたが、あっという間に停電。丸二日、余震と冷蔵庫の中身の心配とで落ち着かなかった。とはいえ、幸い我が家では誰も怪我もせず、物も大して壊れなかった。水もガスも通っていたので、風呂には入れなくても特に困ることはなかった。

千歳でも避難所が開設された。市役所の避難所には、多くの観光客が集まったようだ。言葉も色々で大変だったようだ。一つ一つの説明を色々な言語でするのは大変な話だ。加えて、食べ物も、非常食しかないの、宗教上食べられないなどあれば困っただろうと思う。幸いそこまでではなかったようだ。

ある中学校が避難所になった時、先生方が校長先生の指揮のもと、トイレをきれいに保つことを一生懸命にされた。その結果、お年寄りも飲み物を我慢することなく、気持ちよくトイレに行けたし、介助が必要な方には手を貸してあげたそうだ。素晴らしい！

皆が本当に協力し合って、肩寄せ合って、譲り合っている姿を見られると、「あ～日本人っていいなあ」と思う。

非常食の一つ。暖かく食べられるカレーライス



災害の思わぬ副産物は、こうした日本人の良いところと、ブラックアウトした夜空の星のすばらしさだった。

あれから2か月以上が経ち、厚真やむかわ・穂別等では、避難所が少しずつ減って行って、仮設住宅も出来てきた。水や電気も復旧し、殆どの学校には子どもたちの声が戻った。校舎が一部壊れたところはある。あちこちの家々も半壊、一部損壊などで、修理をお願いしても中々来てくれず、今もただただ待っている方が殆どである。

お墓は墓石が転がり、まだ手付かずのままの所も多い。同じ町内であっても、場所によって揺れが異なり、家の壊れ方も違う。加えて、持つ者と持たざる者の差が徐々に明白になってきている。それでも、日々、大人も子どもも、前を向いて進んでいる。まだまだ支援は続く。私も出来る範囲で、支援を続けていきたい。

境界あれこれ(10) P77～ 先人の知恵から (22) P208～

岡崎正明

「こんなもん…所詮しれてますわ」。病院の一室で、高齢の女性と看護師長がそんなやりとりをする。

何のことかといえば、最近まで再放送していた朝の連ドラ「カーネーション」のあるシーン。夏木マリ演じる主演の小原糸子は、ファッション界で有名なコシノ三姉妹の母であるデザイナー・小篠綾子がモデルである。上記のシーンは晩年の糸子がかかりつけの病院で、ベテランの看護師長と会話する場面だ。

互いにその道一筋でやってきた2人が、医療・服飾というそれぞれの専門分野の素晴らしさや、可能性に惚れ込みつつも、しかしそれだけではどうしようもないことがある現実に対する諦念を語る。

私はなんだかこのシーンに心底惚れてしまった。というか、この話を入れた脚本家に「スゲーなあ」と感心してしまった。別に物語の本筋とは直接関わらないエピソード。だがこのやりとりがあるだけで、2人の女性が、人生をかけて歩んできた道への愛おしさや苦しさといった複雑な感情や、プロフェッショナルとしての葛藤が見えてくる。

本気で究めてきた「その道」のすごさを知るのと同時に、その限界も、世界がもつと広いことも分かっている。そういう姿勢に、私はなんだか共感を覚えるところがある。ビートたけしは東北の震災の際、『被災地にも笑いを』なんて言うヤツがいるけれど、今まさに苦しみの渦中にある人を笑いで励まそうなんてのは、戯れ言でしかない」と言い放ち、こんな時お笑い芸人にできることなどないと断言した。

爆笑問題の太田も、以前ラジオかどこかで「お笑いなんてくだらない」的な話をしていたのを覚えている。元日本代表監督のイビチャ・オシム氏は「ドーハの悲劇」について「悲劇？たかがサッカーだ。誰が死んだわけでもない」と、何かとドラマチックに語りたがるマスコミを諭した。

冷静と情熱の間…なんていう小説があったが、その道のプロというのは、その道を知り尽くし、愛してやまないからこそ、その道をどこか俯瞰して見ているものだと思う。だから逆に、自分の取り組んでいる世界がいかにすごいのか語らない人の話に、私はあまり魅力を感じない。

対人援助の仕事は好きだし、その可能性も信じているが、「世の中にこんな仕事ばかり増えてもなあ」、「所詮なんの食物も、人の役に立つモノも生み出さないなあ」とか思っていたりするの、正直なところである。

役場の対人援助論(27) P120～

浦田雅夫

今年の4年生は、社会的養護へ就職した者が複数。うれしいことです。頑張ってください。長く働けるよう、応援したいです。

社会的養護の新展開 4 P57～

中村周平

11月7日、知り合いの大学教員の方から、東京の日本体育大学でお話させていただく機会をいただきました。在学生の多くが将来、体育の教員を目指しているとのことでした。そのような学生の皆さんに、私がどんなことを伝えられるか。内容について悩みましたが、まずは事故被災者の事故後の現状を少しでも知ってもらおうと

いう気持ちで当日臨みました。そのことについては、また別の機会に詳しく書かせていただこうと思います。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

P101～

団士郎

退職して8ヶ月。有り難いことだと思うが、まったく暇にならない。

週末土日は全国各地でワークショップを実施していることが多い。木曜日は市職員相談室でカウンセラー仕事を20年程も続けている。ウィークデイ夜には月例で家族理解の勉強会を三カ所で開催している。

東日本家族応援プロジェクトで現地に9、10、11、12月に毎年訪れるようになって8年が過ぎた。10年の満願まであと二年。参加院生達の事前調査と報告会が立命館大学で月例実施されるのに出席する。

当然のことだが、毎年のプロジェクト漫画展作品の準備は、半年前から始めて完成させる。

その間に、3、6、9、12月には「対人援助学マガジン」の発行作業がある。執筆者50人以上、350ページを超す雑誌の原稿整理だけでもなかなかの手間だ。

月刊、季刊雑誌連載の「木陰の物語」（現在、第226話）の執筆も、月初めに送信締切りが設定されている。これは20年近く一度も外したことはない。これに単発の講演やワークショップが入ってくる。

大学院が終了したので、月曜日と火曜日が少しゆっくりした。そこにやりたいことを入れて楽しもうとするから、結局、慌たしい日々は変わらない。

ただ、楽しいことしかしていないので、忙しいのにストレスはなく、至って健康だという良循環の日々だ。

*

最近ハマっているバンド・デシネ。フランス中心にヨーロッパのコミックスのことだが、日本のそれと比較すると、個人作家性が強い。出版も大判でフルカラーのものが多く、日本のコミックスと比べると高価だ。

「青い薬」はHIVキャリアの連れ子女性（子どもも母子感染している）と作家自身

との暮らしを描いた、私小説風の作品。



「青い薬」青土社刊 2400円

エイズで亡くなる人はグッと減った現在、治療しながら、あるいは発症をコントロールしながら生きてゆく病にはなっている。

だが、その渦中で共に暮らすためには様々な超えなければならぬ課題に直面する。それらが丁寧に、パートナーへの愛情を込めて描かれる。

当事者である女性の細やかさや覚悟の決め方、それそうになるところなど、バンド・デシネならではの表現だ。

こんな風に、「木陰の物語」が描けているなら良いなあと思いつつ読んでみた。

他にも、「異邦人」。これはご存知、カミュの作品のバンド・デシネ版だ。文庫は退屈で投げ出した記憶しかなかったものが、とても面白く読めた。



異邦人 彩流社刊 1800円

蠅螂の斧「続・家族理解入門」(5)

P51～

大谷多加志

前号からの数か月でいくつかの試験や審査を受けました。資格試験だったり、論文審査だったり、中身はいろいろでしたが、受けるからにはパスすることを期待する心があり、うまくいかなかったら…という不安があり、実際に不合格になった際には自分自身の価値が下がったようながっかり感が伴う。そうすると「受かるように」振る舞いたくなる自分がじわっと生まれてくる。こんな気持ちで、忖度や権力への迎合を生むのだからなあ、実感した。人にジャッジされなくても、自分は自分。そう心から思えるには、まだ今しばらくの精進が必要なようです。

新版K式発達検査をめぐって

P***

馬渡徳子

今月の認知症カフェで、ご住職からこんなことを教えて頂いた。

「平和」の「平」という字は、下の十が天秤で、その上のでんてんが、お米を表している。平和な社会とは、世界中のどんな人々にも、お米(食べ物)が、平等に行きわたる社会をいうのだそうだ。

だからこそ、私は、戦争に絶対に反対!! 逆進性の消費税増税にも、私は絶対に反対!!を表明する。

「ケアプラン」の価値

P***

竹中尚文

【料理】今回は野菜炒め。

準備:白菜、チンゲンサイ、ネギ、ニンジン、キノコ、もやし、豚バラ肉、ニンニク、レッドペッパー、干し貝柱、オイスターソース、腐乳(フルー)、塩、ホワイトペッパー(量はすべて適当。野菜はあるだけの種類)

- ① ニンニクをみじん切り。レッドペッパーは上部を切り取って、種を捨てる。フライパンに油をひいて、熱して待つ。熱くなったら、ニンニクとレッドペッパーと豚バラ肉を投入。
- ② 野菜をフライパンに熱をしっかりと入れて。軽く塩コショウをして、しっかりと干し貝柱を投入。
- ③ 腐乳を投入。
- ④ オイスターソースを入れて、全体の味をチェック。
- ⑤

野菜から水が出たら、水溶き片栗粉で整える。

【音楽】今回はジャズ。マックス・ローチとクリフォード・ブラウンカルテット。私はクリフォード・ブラウンのきらめくようなトランペットの音が大好きだ。彼は20代で自動車事故で亡くなりました。それ以後のマックス・ローチはすっかり力をなくしてしまいました。お薦めは The best of Max Roach and Clifford Brown in concert

盆踊り漫遊(4)
P103~

鶴谷 圭一

「十年」と言うオムニバス映画を見た。日本の十年後を若手監督がいろんな切り口から映像で表現する。その中の一つの話。

AI特区になった田舎の小学校で、AIにコントロールされた子どもたちが登場する。頭に電極でも埋め込んであるのか、サボったりケンカをしそうになると頭の中でAIの声が響く。「席に戻りなさい」「落ち着きなさい」……

それでも言うことを聞かないと、孫悟空の頭の輪っかよろしくキーンと耳鳴りがしてお仕置きが下される。ある日、一人のやんちゃな少年が、可愛がっていた馬が処分されることを知り馬小屋から逃がそうと奮闘する。通りかかった2人の友達も、キーンに負けずに馬を逃がすことに成功した。馬を追いかけ、森の中で一夜を過ごした3人。

AIはコントロールできない3人のイレギュラーでショートしてシステムダウンしてしまった。一夜明けて大人たちが探しに来た。AIは再起動して……バージョンアップされていた！（人間的な気持ちを大切にしたいように！）

観た直後はそれほど感じなかったけど、思い返すと人間の可能性、子どもたちの希望を感じる映画だった。仕事にICT、AIがどんどん入ってくる現代。目の前で育てている子どもたちも、AIを黙らせるようなイレギュラーな力を秘めていてほしい。 原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から
P63~

乾 明紀

大阪万博が決まりましたね。東京五輪は予算の膨れ上がりが大問題になっていますが、果たして大阪万博はどんなイベントになるのでしょうか。



かつての大阪万博は、高度経済成長を成し遂げた日本の元気を世界に発信する場でした。今回は課題先進国の解決力を世界に示すものとかになるのでしょうか。

さて、大阪万博の太陽の塔(テーマ館)は、ご存じ岡本太郎の作品ですが、このテーマ館のサブ・プロデューサーはSF作家の小松左京でした。小松は当時30代。芸術を爆発させる岡本と新進気鋭の小松は、素晴らしいコンビネーションになりました。

彼らが向き合った「人類の進歩と調和」(大阪万博のテーマ)は未だ達成されていませんが、今回の万博も社会を鋭く見つめる人物に関わってほしいですね。さらには、当時の小松のように未来ある若者(30代を若者と言う年齢になりましたw)が参画し、構想を練ってほしいですね。

周旋家日記(25)
P117~

水野スウ

半年余りかけて書きあげた2冊目の憲法の本、「たいわけんぼう Book+」をやつと9月に出版することができました。

前作の「わたしとあなたのけんぼう Book」から3年。200回近く憲法のお話出前にいって、話を聞いてくださった方たちと対話し、過去の歴史と対話し、岸内閣の憲法調査会で、9条をかえる必要はない、という意見をのべた亡き父とも対話し、そして何よ

り、編集とデザインを担当した娘と、対話に対話をかさねてできあがっていった本です。

憲法を語る時、平らに話す、ということもいつも一番に心がけているけれど、戦争の反対は対話です、と社会学者の暉峻淑子さんがおっしゃっているのを知ってからはいっそう、その想いがつよくなりました。

対話と、平らに話す=平話と、平和とは、ひとつつながり。そのことを実感しながら読む人に語りかける、そんな本を目指しました。それに代わって、9条改憲案のややこしいからくりを、知ったものの責任として、なんとかわかりやすくほどこいて伝えよう、と心を砕いてようようできあがったのがこの本でした。

なんとうれしいことに、この「けんぼう Book+」と前作の「けんぼう Book」がともに、第24回「平和・協同ジャーナリスト基金 荒井なみ子賞」を受賞しました。その一報を聞いた時はあまりにびっくりして、ジャーナリストでない私が頂戴するなんて何かの間違いではないかと、いく度もほっぺをつねりました。

1995年に設立されたこのファンドは、市民が選び、市民が贈る、日本版ピューリッツァ賞とよばれているもので、平和、反核、人権、協同、連帯、といった分野ですぐれた作品を発表したジャーナリスト、および、ジャーナリストにかぎらずそういう作品をだした個人を、毎年選んで、これまでに200人余りの団体や個人にこの賞を贈ってきたそうです。

平和は一人ではつくりえない、分断でなく助けあいによる協同がなんとしても不可欠だ。そういう民主主義を育てていくには、それが重要なものだ、という世論をまきおこさなくちゃならない。だからいい報道をしたメディアやジャーナリズムをちゃんとたたえて、市民からのエールを贈ろうと、24年前、はじめはほんの数人の市民がカンパを出しあってつくったのが、この平和・協同ジャーナリスト基金。今でも市民がもちよるカンパだけで運営、継続されているそうです。

12月8日、日本記者クラブでおこなわれた贈呈式に行ってきました。大賞は琉球新報の「沖縄県知事選における、一連の

ファクトチェック報道」。奨励賞5点の中には、三上智恵さん大矢英代さん監督のドキュメンタリー、少年たちがゲリラ兵、スパイに仕立て上げられていった沖縄戦の裏の歴史を描いた「沖縄スパイ戦史」。3.11後の福島の実態と、避難された方たちの状況をずっと取材してきた朝日新聞記者、青木美希さんのルポ「地図から消される街」。「ゲンバクとよばれた少年」は長崎浦上で被爆し、小学校の先生や友だちからゲンバクと呼ばれ、さらに被差別部落に生まれたということで二重に差別されて生きてきた、中村由一さんのお話の聞き書きを児童書にしたもの、など。

私にいただいた荒井なみ子賞というのは、戦後すぐから、生活協同組合の活動を熱心にしてこられた荒井なみ子さん(故人)が、平和と協同こそ自分の生き方だとこの基金の主旨におおいに共感、多額のカンパを寄付なさったことで、この方のお名前を冠した賞が創設されたという、主に女性に贈られる特別賞とのこと。

贈呈式で選考理由をお聞きしながら、2冊のけんぼう Book とともに、35年続「紅茶の時間」のこと、2年半前にはじめた、社会のことふつうに話そう、の「草かふえ」のこと、2冊のけんぼう Book の間にでかけた出前けんぼうかふえのこと、手描きの個人通信「いのみら通信」のこと、金沢のピース仲間とのいろんなアクションのこと、みんなふくめて、この賞をいただいたのだとようやくわかりました。選考委員の方たちが、週一で家を開く「紅茶の時間」や全国へのお話の出前のことを、とてもユニーク！ってびっくりされたのがよく伝わってきました(笑)。「安倍政権は改憲にしゃかりき。それに引き換え、国民の側の憲法論議はそう熱心ではない。だとしたら、今こそ、水野さんのような活動が効果的ではないか」という理由で2冊のけんぼう Book を評価してくださったのでした。

贈呈式の翌々日は、金沢のピース仲間と紅茶仲間が合流して、「おめでとうとありがとうの会」をひらいてくれます。私と出逢ってくれたみんなのおかげでいただいた賞だから、文字通り、ありがとうが行ったり来たりする、あったかい会になりそうです。

一人では決してここにたどり着くことのできなかったけんぼう Book。その意味で、たくさんの人と対話し、平和を求めてつながってきた本だったから、この賞をいただいたのだとも思います。さあ、この賞を頂いたからには自信もって、人にも言おう、この本読んで！ 来年あるかもしれない改憲のための国民投票、その前の必読書だよ！と勧めちゃおう、とひそかに、でも熱く、心に決めています。

2冊の本に収めた文章のいくつかは、この「対人援助学マガジン」に書き続けた原稿が、その土台になっていることを思う時、あらためて団編集長さんにお礼を申し上げます。私に、憲法 21 条で保障されている表現の自由を、文字通り、実践する場を確保してくださって、本当にありがとうございます、と。

新刊「たいわけんぼう Book+」、ご購入希望の方は、sue-miz@nifty.com またはこの本を二人三脚でつくった娘のウェブサイト

<http://maiworks.cart.fc2.com> までご連絡くださいませ。税込 900 円、一冊の送料は 180 円です。

きもちは言葉をさがしている(34)
P93~

荒木晃子 「継続は力なり」

この言葉に、何度背中を押されたことだろう。今号も、体調不良や何やらで、ふと連載を諦めかけたこともあった。書けないのではない。書きたいことがありすぎて、文章が膨れ上がってしまうのだ。頭の中では連載を書いているつもりが、読み返してみると、とんでもない方向(持論)へ向かっていたり。原稿を全て書き換えたいけれど、次は、大切に思う当事者の語りを文章にすることに抵抗を覚え、葛藤したりと、風邪で寝込みながらも頭と心はフル回転。これでは、熱が下がらないのも無理はない。初稿以来、一度も休まず継続していた連載も、ここまでかと一度は諦めた。にんげん、諦めが肝心とはよく言ったもので、とたんに肩の力が抜け、いま、最も伝えたい言葉が文字になった。短い文章ではあ

るけれど、これだけは、皆さんに伝えたい。かつ当事者の語りなのだ。と校正しながら確信している。

生殖医療と家族援助

P80~

見野 大介

ギックリ腰を経験して以降、毎日ストレッチとマッサージクッションをしたおかげで、なんとか秋のイベントラッシュを乗り切ることができました。体は資本ですね。

年内は溜まっている注文ラッシュとの戦いになるので、年末までバタバタしてることになるでしょう。あとは、年末恒例の餅つき。今年は何件つきに行くことになるか楽しみです。

ハチドリ器
P4~